「日月神示」
に預言された
「神の救いの計画」

１日月神示は「神の救いの計画」の解説書

２「世の元からの神」の水も漏らさぬ仕組

（「一厘の秘密と仕組」）

３「岩戸開き」のための神の秘策

１日月神示は「神の救いの計画」の解説書

日月神示とは

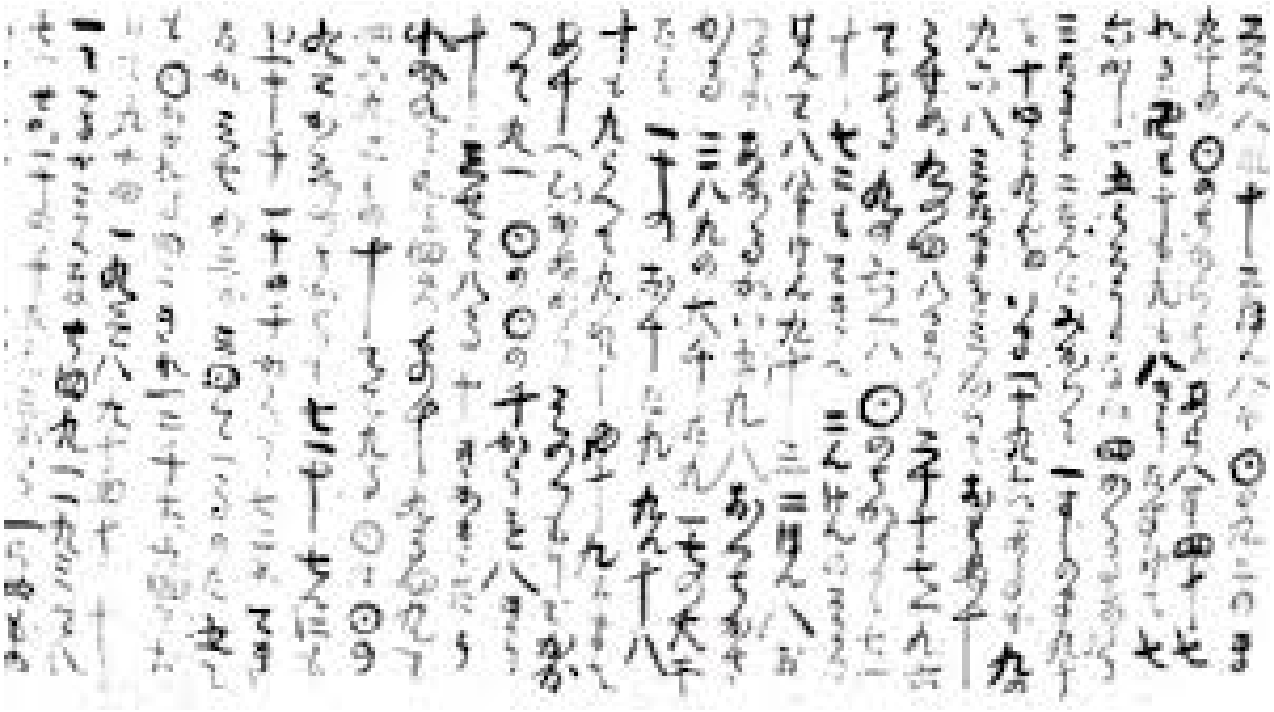
・大本（教）の信者だった岡本天明（１８９７～１９６３）の、自動書記現象によって生まれたもの
・原文はほとんどが漢数字や記号、そして若干のかな文字の混じった文体で構成され、抽象的な絵だけで書記されている「巻」もある
・本巻３８巻と補巻１巻の３９巻が発表されている
・他にも、神霊より発表を禁止されている「巻」が１３巻ある

・日月神示は、書記した天明自身も当初は読むことができなかったが、仲間の神典研究家や霊能者の協力などで少しずつ解読が進み、天明亡き後も妻である岡本三典さん（１９１７～２００９）の努力により、一部を除き、かなりの部分が解読された（ウィキペディア百科事典）

★注目

書記した本人すら、読むことができなかったという点

本人の意思が、神示に反映されていない



◆「神の救いの計画」の解説書的なご神示

・「約束の時」と日月神示

「地震かみなり火の雨降らして大洗濯するぞ。よほどシッカリせねば生きていけんぞ。・・・」

（第一巻　上つ巻　三十九帖　39）

「百人千人の改心なれば、どんなにでも出来るなれど、今度は世界中、神々様も畜生も悪魔も餓鬼も外道も三千世界の大洗濯だから、そんなチョロイ事ではないのざぞ。・・」（第四巻　天つ巻　第四帖　111）

「・・もとの昔に返すのざぞ、つくりかためのの終わりの仕組みぞ、終わりは始めぞ、始は一（霊）ぞ。富士、都となるのざぞ、・・」（第五巻　地つ巻　第十一帖　148）

「・・・世界中唸（うな）るぞ。陸が海になるところあるぞ。今に病（やまい）神（がみ）の仕組みにかかりている臣民苦しむ時近ずいたぞ、病はやるぞ、この病は見当とれん病ぞ、・・・」

（第五巻　地つ巻　第一六帖　153）

「・・毀(こわ)すのではないぞ、練(ね)り直(なお)すのざぞ。世界を摺鉢(すりばち)に入れて捏(こ)ね廻し、練り直すのざぞ。・・・」

（第六巻　日の巻　第一帖　174）

「・・・地つちの軸動くぞ、・・」（第八巻　磐戸の巻　第5帖　241）

「・・世界中一度にゆすぶると申してあろう。釦(ぼたん)一つででんぐり返ると申してあること、未(ま)だ判らんのか。・・・」

（第二十四巻　黄金の巻　第十八帖　529）

・万教同根と日月神示

「・・・神も仏もキリストも元は一つぞよ。・・・」

（第四巻　天つ巻　第四帖　111）

「・・・神、仏、耶（や）ことごと和し、和して足り、太道ひらく永遠、富士は晴れたり、太神は光出づ、神国のはじめ。」

（第五巻　地つ巻　第十九帖　156）

「世の元の神でも御魂（みたま）となっていたのでは真（まこと）の力出ないのざぞ。今度の経綸（しくみ）は世の元の生き通しの神でないと間に合はんのざぞ。・・」（第七巻　日の出の巻　第二十帖　233）

「・・・この先もう立て替え出来んギリギリの今度の大立て替えぢや。いよいよの立て替えざから、元の神代(かみよ)よりも、も一つキの光り輝く世とするのぢゃから、なかなかに大層ざぞ。・・・途中から出来た道では今度という今度は間に合わんのざぞ。根本からの道でないと、今度は根本からの立て直しで末代続くのぢゃから、間に合わん道理わかるであろうがな。・・・」

（第十五巻　岩の巻　第二帖　367）

「・・・途中からの神は途中からの神、途中からの教(おしえ)は途中からの教、今度の御用は元のキの道ざぞ、世の元からの神でないとわからんぞ、出来はせんぞ、生まれ赤子の心とは、途中からの心、教(おしえ)、すっかり捨ててしまえということざぞ。・・・」(第二十巻　梅の巻　第二十一帖　448)

「・・・神の道は一本道であるから、多く見えても終わりは一つになるのぢゃ、今が終わりの一本道に入るところ、この道に入れば新しき代は目の前、神も今まではテンデンバラバラでありたなれど、今に一つにならねばならぬことに、天が命じているのであるぞ。・・・」(五十黙示録　第五巻　極め之巻　第二帖)

・「約束の地」と日月神示

「富士は晴れたり日本晴れ、富士に御社(みやしろ)してこの世治めるぞ。・・」(第四巻　天つ巻　第一帖　108)

「神国、神の宮早うつくれ。今度此処(ここ)へ神が引き寄せた者は、みなキリストぢゃ。釈迦ぢゃぞと申してあろう。磨けば今までの教祖にもなれるミタマばかりぞ。それだけに罪深いぞ。岩戸あけて、めぐり果たさせたいのぢや。・・・」(第二十四巻　黄金の巻　第三十三帖　544)

「・・・天国のカタチ、ウツシが奥山ぞ。・・・」

（第二十六巻　黒鉄(くろがね)の巻　第八帖　626）

「・・・神示うつして下されよ。世界にうつすことよろこびぞ。

地に天国うつすことぞ。難しいことないぞ。・・・」

（第二十七巻　春の巻　第八帖　665）

「新しき世界の宮は土地であるぞ、住所(すまい)であるぞ、永遠

に在(おわ)す神は住む土地であるぞ、・・・」

（五十黙示録　第五巻　極め之巻　第二十帖）

〈解説〉

◆「富士とは神の山のことぞ。神の山はみな富士と言うのぞ。・・」

（第一巻　第五帖　5）

➡富士＝神の山＝奥山＝「約束の地」

◆「・・天明の住んでいるところ奥山ぞ。・・」

（第二巻　下つ巻　第二十七帖　69）とあるが、別のところでは

「・・奥山、奥山ぞ、同じ奥山が、その時々により変わって来るぞ、・・」（第二十一巻　空の巻　第九帖　464）とある

➡「奥山」＝「約束の地」

奥山・大奥山（「約束の地」）について

「ここはいと古い神まつりて、いと新しい道ひらくところ。

天狗さん鼻折りて早う奥山に詣（まい）れよ。・・・」

（第二十四巻　黄金（こがね）の巻　第六十帖　571）

「・・・てんしは奥山にお出ましぞ。」

（第二十四巻　黄金の巻　第六十五帖　576）

「大奥山は神人交流の道の場である。道は口で説くものではない。行ずるものである。教えは説かねばならない。・・・・
奥山は奥山と申してあろう。いろいろな団体をつくってもよいが、いずれも分かれ出た集団、一つにしてはならん。
奥山は有りて無きもの、無くて有る存在である。奥山と他のものとまぜこぜまかりならん。大き一つではあるが別々ぞ。・・・」（補巻　月光の巻　第七帖　794）

「大奥山と教会とをまぜこぜしてはならん。教会やその他の集団は現われ、大奥山は隠れじゃ。大奥山はこの度の大御神業に縁(ゆかり)のある神と人とを引き寄せて練り直し、御用に使う仕組。見て御座れ、人民には見当とれんことになるぞ。」

（五十黙示録　補巻　月光の巻　第二十帖　807）

「・・・大奥山は有りて無き存在、人間の頭で消化されるような小さな経綸(しぐみ)してないぞ。大奥山だけに関係持つ人もあるのぢゃ、囚われてはならん。三千世界を一つにまるめるのがこの度の大神業ぞ。世界一家は目の前、わからんものは邪魔せずに見物して御座れ。神の経綸(けいりん)間違いなし。」（五十黙示録　補巻　月光の巻　第二十一帖808）

２「世の元からの神」の水も漏らさぬ仕組
（「一厘の秘密と仕組」）

隠された八通り目の預言

「・・・今の法律でも、教育でも、兵隊でも、宗教でも、この世は立て直らんぞ、新しき光が生まれて世を救うのぢゃ、新しき光とはこの神示ぢゃ、この神ぢゃ。七つの花が八つに開くぞ、この神示八通りに読めるのぢゃ。七通りまでは今の人民さんでも何とかわかるなれど、八通り目はなかなかぞ。一厘が隠してあるのぢゃ、隠したものは現れるのぢゃ、現れているのぢゃ。・・・」（第二十三巻　海の巻　第十五帖　507）

◆「約束の人」香代子先生と秘密結社「ヤタガラス」が預かった「神の救いの計画」に、八通り目の神の「一厘の秘密と仕組」が隠されている

➡「神の救いの計画」を知ることで、はじめて「日月神示」に預言された、神の「一厘の秘密と仕組」も明らかになる

「・・・残る一厘は誰も知らぬ所に仕かけてあるが、この仕組、心で取りてくれよ、・・・」（第一巻　上つ巻　第二十八帖　28）

「・・・一所（ひとところ）だけ清い穢れんところ残しておかな足場なく、こうなってはならんぞ、カタ出さねばならんぞ、・・」
（第十三巻　雨の巻　第十一帖　345）

「・・・残る一厘はいよいよのギリギリでないと申さんから、疑うのも無理ないなれど、見て御座れよ。神の仕組、見事成就致すぞ。一厘のことは知らされんぞと申してあろう。申すと仕組成就せんなり。・・・」（第二十九巻　秋の巻　第二十八帖　769）

◆暗号者と日月神示は、まるで打ち合わせをしているかのように、共に沈黙を守った

➡「神の救いの計画」を成就させるため

（・・一厘のことは知らされんぞと申してあろう。

申すと仕組成就せんなり・・）

「・・・世の元の神の仕組みというものは、神々にもわからん仕組みであるぞ、この仕組みわかりてはならず、わからねばならず、なかなか難しい仕組みであるぞ、知らしてやりたいなれど、知らしてならん仕組ぞ。・・・」

（第一巻　上つ巻　第二十一帖　21）

「・・・この神の国には世の元からの生神が水も漏らさぬ仕組してあるから、いざ出て参りて得心ゆくまでかかりて御座れ、敗(ま)けても悔しくないまで攻めて御座れよ、堂々と出て御座れ、どの手でもかかりて御座れ。その上で敗けて、これはかなわん言うときまでかかりて御座れよ。学、勝ちたら従ってやるぞ、・・・」

（第八巻　磐戸の巻　第八帖　244）

〈解説〉

「約束の人」（香代子先生）と「暗号者」と「ご神示」（大本の神典と日月神示）の絶妙な関係は、「世の元からの神の仕組」！！

➡世の元の大神は暗号者に秘密の仕掛け（暗号）をするように指示し、大本の神典と日月神示には「神の救いの計画」の解説書としての役割を与えた

➡「約束の人」（預言されし者）の出現にあわせて、暗号と神の「一厘の秘密と仕組」を解き明かす、「解き放たれし者」も用意された

ユダヤ教のカバラの教え

神の計画の中で、人は輪廻転生を繰り返し、神の全体的計画の特殊な領域の仕事を完遂すべく遣わされていると考えられており、それゆえ、人の誕生と再生はでたらめに行われるのではなく、「天の監督」・神の意志によって注意深く運営されている

（『ユダヤの秘儀　カバラの象徴学』 セヴ・ベン・ハレヴィー著　大沼忠弘訳）

◆私もあなたも、すべての人は神の計画の参画者として、神に選ばれて誕生したのであり、一見偶然と思われることも、神の世界から見れば必然的なことかも！？

3「岩戸開き」のための神の秘策

岩戸開き

「今度の戦は神力と学力のとどめの戦ぞ。神力が九分九厘まで負けたようになった時に、まことの神力出して、グレンと引っ繰り返して、神の世にして、日本のてんし様が世界まるめて治(しろ)しめす世と致して、天地神々様におめにかけるぞ。てんし様の光が世界の隅々まで行きわたらせる仕組が三四五(みよいず)の仕組ぞ、岩戸開きぞ。
いくら学力強いと申しても、百日の雨降らすこと出来まいがな。
百日雨降るとどんなことになるか、臣民にはわかるまい。百日と申しても、神から言えば瞬(またた)きの間ぞ」(第二巻　下つ巻　第二十帖　62)

「・・・三四五（みよいず）の仕組とは、みよいづの仕組ぞ、御代出づとは、神の御代になることぞ、この世を神の国にねりあげることぞ、・・・」（第二巻　下つ巻　第十四帖　56）

岩戸開きの鍵

「岩戸開く仕組知らしてやりたいなれど、この仕組、言うてはならず、言わねば臣民わからんし、神苦しいぞ、早う神心になりてくれと申すのぞ、身魂の洗濯急ぐのぞ。アイカギ　、〇〇　コノカギハ　イシヤト　シカ　テ　ニギルコトゾ、・・・」（第二巻　下つ巻　第二十二帖64）

（注：〇→〇の中にチョボ）

➡岩戸開きの鍵はイシヤと手を握ること

「イシヤ」（フリーメーソン）の悪の仕組

「・・・イシヤの仕組にかかりて、まだ目さめん臣民ばかり。日本精神と申して卍（ぶつ）の精神や十（キリスト）の精神ばかりぞ。今度は神があるかないかを、ハッキリと神力見せて、イシヤも改心さすのぞ。・・・」（第二巻　下つ巻　第十六帖　58）

「悪の仕組は、日本魂を根こそぎ抜いてしもうて、日本を外国同様にしておいて、ひと呑みにする計画であるぞ。神の臣民、悪の計画通りになりて、尻の毛まで抜かれていても、まだ気づかんのか、・・・」（第八巻　磐戸の巻　第十帖　246）

〈解説〉

イシヤとは、秘密結社「フリーメーソン」に象徴される

「国際的秘密組織」

・「フリーメーソン」とは「自由な石工」という意味で、古代の西洋において、石工（メーソン）同士が集まった組合が起源とされている

・フランス革命以降の歴史はフリーメーソンによってつくられた

・アメリカの独立戦争、ロシア革命、第１次、第２次世界大戦、これらもフリーメーソンによって意図的に起こされたもの

（フリーメーソン研究の第一人者、久保田政男氏の見解）

・フリーメーソンは世界を思うままに操る「影の世界政府」として知られている

・秘密結社組織というのは、フリーメーソンだけでなく、ほかにも数多く存在する

・「影の世界政府」という意味では、フリーメーソンよりも、イルミナティーやビルダバーグ・ソサエティなどのほうが重要だという研究家もいる

・しかし、日月神示の観点からすれば、そうしたことはどうでもよい

歴史を操る「国際的秘密組織」は事実存在するし、その秘密組織の代名詞として使われるのが、最大級の組織力を誇るフリーメーソンなのである

（『日月神示』中矢伸一著　徳間書店より）

◆どうして、「悪」のイシヤと手を握ることが、「岩戸開き」
すなわち、この世を「神の世」とする鍵なのか？
その理由は後で説明する

◆まず、イシヤの「悪の仕組」について説明する

イシヤの「悪の仕組」

・3S 政策とは、大衆の関心を政治に向けさせないようにとられた愚民政策

・3S はスクリーン、スポーツ、セックスの頭(かしら)文字をとったもの

（安岡正篤(まさひろ)は第二次世界大戦終結後、連合国総司令部（GHQ）が日本の占領政策を実行するにあたり、「3S 政策」を策定したことを、GHQ のガーディナー参事官から直接聞いた）

・この政策により日本の性風俗が開放され、映画が興隆し、プロ野球をはじめとするスポーツが国民的行事となった

・民衆をスクリーン（映画）、スポーツ、セックス（性産業）に目をむけさせることによって、民衆が感じている社会生活上の様々な不安や、政治への関心をそらせて民衆を思うままに操作できる（ウィキペディア百科事典参照）

◆日本への原爆投下を命じ日本の占領を進めた、フリーメーソンの頭目

トルーマン大統領の言葉

「・・・モンキー（日本人）を『嘘の自由』という名の檻で、我々が飼育するのだ。

彼には多少の贅沢と便利さを与えるだけでよい。そしてスポーツ、スクリーン、セックス（3S）を解放させる。これで真実から目をそらす。

モンキーたちは我々の家畜だ。家畜が主人である我々のために貢献する。

それは当然だ。そのためには、我々の財産である家畜は長生きさせねばならない。（農業・医療品などで）病気にさせ、しかも生かし続ける。

これにより我々は（医療や労働で）永く収穫を得ることができる。これは戦勝国の特権である」

（『日本民族抹殺計画　やつらは「金」を狙っている！』 船瀬俊介著　ビジネス社より）

「シオン賢者の議定書」（世界征服の計画書）

・「シオン賢者の議定書」は、「秘密権力の世界征服計画書」という触れ込みで広まった文書で、１８９０年の終わりから１９００年代のはじめにかけてロシア語版が出版された。

・この文書は１８９７年８月２９から３１日かけて、スイスのバーゼルで開かれた、第１回シオニスト会議の席上で発表された、「シオン２４人の長老」による決議書であるという体裁をとっている。しかし、ロシア帝国内務省警察部警察局によって捏造（ねつぞう）されたとする説が有力で、イギリス紙『タイムズ』は、１９２１年８月１６日から１８日にかけて「シオン賢者の議定書」が偽書であると暴露した。というのも、この文書は既に発行されていた『マキャベリとモンテスキューの地獄での対話』（モーリス・ジョリー著）と、表現上の類似があったから。（ウィキペディア百科事典参照）

「・・・我々の賢哲の樹立した政治経済学は、王者の威力が資本にあることを明示している。資本が全世界に於いて絶対支配を獲得するためには、商工企業を独占する自由を確保しなければならぬ。この計画を全世界に於いて実現すべく、我々の間接直接の摩の手が既にこの事業に着手している。かかる自由は産業家に政治的勢力を与えるが、この勢力は民衆の圧迫に役立っている」（第5議定書）

「・・・非ユダヤ人の脳裏から神霊の観念を奪い取り、その代わりに個人主義的打算的利欲と肉体的享楽主義的欲求とを植えつけねばならぬ。非ユダヤ人がこれに気付かぬようにするには、彼等の心を商業と工業方面に向けねばならぬ。かくすれば各国の非ユダヤ人等は国家社会など眼中になく、唯々自己の利得のみを追い、利害戦に夢中になって、自己の共同の敵に気付かなくなるだろう。・・・（中略）・・・優越を得んが為の極度に緊張した闘争と、経済生活に対する衝動とは、絶望的な、しかも悲惨極まる冷酷な社会を実現するであろう、否、既に実現したのである。斯の如き社会は高等政策と宗教とを全然忌み嫌うようになり、これを指導するものは、ただ利得打算すなわち金力のみとなり、金力によって享受出来る物質的快楽の為に、黄金を完全に偶像化するであろう」（第4議定書）

〈解説〉

◆フリーメーソンに象徴される「イシヤ」は、「人の力」で世界を支配し統一しようとしている

◆それは、人の生存に必要な資金、資源、食料、そして情報など独占し、人を支配し世界を統一するというもの

◆それは、人による人の支配のワンワールド、言い換えれば、世界を「人の世」にすること

◆これは、世界を「神の世」にするという「神の計画」と全く反対のはたらき

◆だから、日月神示はイシヤのことを悪と断言している

イシヤと手を組む理由1

◆悪改心さして、五六七（みろく）の嬉し嬉しの世にする

「・・・悪殺してしまうのではなく、悪改心さして、五六七の嬉し嬉しの世にするのが神の願いざから、ここの道理忘れるでないぞ。・・・」（第六巻　日月の巻　第十一帖　184）

「・・・悪と善と立て別けて、どちらも生かすのざぞ、生かすとは神のイキに合わすことぞ、イキに合えば悪は悪ではないのざぞ。・・・」（第八巻　磐戸の巻　第四帖　240）

「・・・三千年の昔から、幾千万の人々が、悪を殺して人類の、平和を求め願いしも、それははかなき水の泡、悪殺しても殺しても、焼いても煮てもしゃぶっても、悪はますます増えるのみ、悪殺すてふそのことが、悪そのものと知らざるや、神の心は弥栄ぞ、本来悪も善もなし、ただ御光(みひかり)の栄ゆのみ、・・・悪抱(いだ)きませ善も抱き、あななう所に御力(みちから)の、輝く時ぞ来るなり、善(ぜん)いさかえば悪なるぞ、善悪不二(ふじ)と言いながら、悪と善とを区別して、導く教えぞ悪なるぞ、ただ御光のその中に、喜び迎え善もなく、悪もあらざる天国ぞ、皆一筋の大神の、働きなるぞ悪は無し、世界一家の大業(たいぎょう)は、地の上(うえ)ばかりでなどかなる、三千世界大和(だいわ)して、ただ御光に生きよかし、・・」(第二十三巻　海の巻　第五帖　497)

〈解説〉

・悪は排除しても、決してなくならない

・神さまは悪を排除するのではなく大きな愛で包み込み、悪を改心させようとしている

・イシヤは人を代表して「悪の御用」（人による人の支配のワンワールド）をしている

・それは、「人の力だけで、幸せな世界がつくれるかどうか」を、神さまから試されているのかもしれない？

＝人の力だけでは、幸せな世界をつくれないことを知るため

➡イシヤを改心させ、「人の世」をつくる「悪の御用」から、「神の世」をつくる「善の御用」に転換させようとしている

イシヤと手を組む理由2

◆イシヤのルーツは暗号者

イシヤ（フリーメーソン）のルーツは「星の暗号者」

・「星の暗号者」

地球の崩壊と再生の「約束の時」に、世界を建て直すために日本から派遣された人々の末裔

・暗号者が、「星の暗号」の暗号装置として設計したのがエジプトの三大ピラミッド

◆「フリーメーソン」はピラミッド建設にルーツがあるという説もある

フリーメーソンの本来の目的

・絶対神の導きによって「神の王国」を建設すること

・この絶対神は、広大な宇宙はもとより、太陽や月、惑星、地球をつくり、あらゆる生物を創造した偉大な建築家

・この思想は、現代のフリーメーソンにも受け継がれていて、万物の創造主は「宇宙の偉大なる建築者」と呼ばれている（『大ピラミッドの謎とスフィンクス』飛鳥昭雄・三上たける）

「・・・何も彼も存在許されているものは、それだけの用あるからぞ。近目で見るから、善じゃ悪じゃと騒ぎまわるのぞ。・・・」（第二十四巻　黄金（こがね）の巻　第六十九帖　580）

「誠の人よ、よく神示見て下され、裏の裏まで見てくだされ。神国の誠の因縁わからいで、三千年や五千年の近目ではスコタンぞと申してあろうがな、てんし天下平らげて、誠の神国に、世界神国に致すのざぞ、世界は神の国、神の国真中の国は、十万や二十万年の昔からではないぞ、世の元からの誠一つの神のことわからな益人（ますひと）とは申されんぞ、神の申すこと一言半句（いちげんはんく）も間違いないのざぞ。・・・」

（第十三巻　雨の巻　第十二帖　346）

暗号者の「岩戸開き」と「岩戸閉め」の2つのはたらき

「岩戸開く役と岩戸閉める役とあるぞ。・・・」

（第一巻　上つ巻　第十八帖　18）

暗号者には
「岩戸開き」（星の暗号者）と「岩戸閉め」（太陽の暗号者）
の2つのはたらきがある

・悪の御用

「・・・悪の世が廻(まわ)りて来た時には、悪の御用する身魂(みたま)をつくりておかねば、善では動きとれんのざぞ、悪も元ただせば善であるぞ、（その働きの御用が悪であるぞ、）御苦労の御役(おんやく)であるから、悪憎むでないぞ、憎むと善でなくなるぞ、天地濁(にご)りて来るぞ。・・・」

（第二十一巻　空の巻　第八帖　463）

「・・・悪はすべてを自らつくり得、生み得るものと信じている。善はすべてが神から流れ来たり、自らは何ものをもつくり得ぬものと信じている・・・」

（第十七巻　地震の巻　第5帖）

〈解説〉

・文明の進歩によって、神の力を必要としない「人の世」が廻ってきた

・「・・・文明も神から生まれたものじゃ。・・・」（第24巻　黄金の巻　第97帖608）とあるように、文明も神から授けられたもの

・しかし、人はそのことを忘れ、「すべて自らつくり得、生み得る」という驕りから、「人の世」になってしまった

・だから、太陽の暗号者は、あえて「岩戸閉め」の悪の御用をした

「この方、悪が可愛いのぢゃ、御苦労ぢゃたぞ、もう悪の世は済みたぞ、悪の御用結構であったぞ。早う善に変わりて心安く善の御用聴きくれよ。・・・」

（第二十一巻　空の巻　第十帖　465）

「・・・仕組途中でグレンと変わり、カラリと変わる仕組してあるのぢゃ、そこに一厘の仕組、火水（かみ）の仕組、富士と鳴門の仕組、結構々々大切に致してあるのぢゃ。・・・」

（第二十二巻　青葉の巻　第十帖　479）

「裏の仕組に（、）入れると表の仕組となり、表の仕組に〇入れると裏の御役となるなり。（、）抜けば悪のやり方となるのぢゃ」（第二十四巻　黄金の巻　第八十五帖　596）

※注（、）は「チョボ」

「神の救いの計画」と暗号

◆神は「神の世」が廻ってきた時には、悪の御用をした暗号者（イシヤ）を、「岩戸開き」の善の御用に転換させようと計画している！！

➡これが、悪の御用に隠された「神の秘策」

◆この計画は、「人の世」から「神の世」への変更の「時」、
すなわち「約束の時」がわからなければ実行できない

➡「約束の時」を知る仕掛けも用意されている

➡それが2つの暗号！！

本物のイシヤ（暗号者）と偽物のイシヤ

「・・・同じ悪にもまた二つあるのぢゃ、このこと神界の火水（ひみつ）ぞ、・・・」（第二十二巻　青葉の巻　第十三帖　482）

◆「イシヤ」は、「岩戸開き」の善のはたらきをした「星の暗号者」の伝統を引き継いでいる。

しかし長い年月の中で、人のエゴによって歪（ゆが）められた

・フリーメーソンが奉じる神「金星」が、堕天使（ルシファー）となった理由

「黎明の子、夜明けの明星よ、あなたは天から落ちてしまった。・・・あなたはさきに心にいった。『わたしは天上にのぼり、わたしの玉座を高く神の星の上におき、北の果てなる集会の山に座し、雲のいただきにのぼり、いと高きもののようになろう』・・」（イザヤ書14章12～14）

本物のイシヤ（暗号者）

➡神のご指示で「古代の神宮」の場所を隠し、ほんとうの歴史を封印して神宮を伊勢に遷して「人の世」の型をつくった（しかし、暗号でほんとうのことを示そうとした）

偽者のイシヤ

➡神になりかわって地上世界を支配しようとしたため、天から追放されて堕天使となった

➡改心しない偽者のイシヤは神に滅ぼされる

「・・・今度は元の生神が天晴(あっぱ)れ現れて、悪は影さへ残らぬよう、根本から大洗濯するのぞ、・・・」

（第十一巻　第十二帖　303）

私たちはどうすればいいのか？

「・・・洗濯と申すのは何事によらん、人間心捨ててしもうて、知恵や学に頼らずに、神の申すこと一つも疑わず、生まれ赤子の心の初心（うぶこころ）になりて、神の教え守ることぞ。身魂磨きと申すのは、神から授かっている身魂の命令に従うて、肉体心捨ててしもうて、神の申すとうり背（そむ）かんようにすることぞ。学や知を力と頼むうちは身魂は磨けんのぞ。学超えた学、智超えた智は、神の学、神の智ざということわらんか・・・」（第八巻　磐戸の巻　第十六帖　252）

「・・・人の心がまことにならんと、まことの神の力現れんぞ。身魂(みたま)磨きとは善いと感じたこと直(ただ)ちに行うことぞ。・・・」

（第二十四巻　黄金の巻　第六十七帖　578）

「・・此の度の岩戸開きは人民使ふて人民助けるなり、人民は神のいれものとなって働くなり、それが御用であるぞ、いつでも神憑(か)かれる様に、いつも神憑かっていられるようでなくてはならんのざぞ。神の仕組み愈々(いよいよ)となったぞ」

（第十三巻　第一帖　335）

「・・もう待たれんからわかりた人民一日も早く奥山に参りて神の御用結構につとめあげて下されよ。世界中を天国にいたす御用の御役、つとめ上げてく下されよ。人間の念力だけでは何程（なにほど）のことも出来はせんぞ。その念力に感応する神の力があるから人間にはわからん、びっくりが出て来るのざぞ。」（第二十四巻　黄金の巻　七十四帖　585）

「・・・三分残したいために三千の足場と申してあるのじゃ。
早う三千集めよ。御役御苦労。」
（第二十四巻　黄金の巻　第六十三帖　五七四）

「皆の者御苦労ぞ。『世界の民の会』つくれよ、人民拝(おが)み合うのざぞ。・・・」（第二十巻　梅の巻　第3帖　430）

三千年、三千世界乱れたる、罪や穢れを身において、この世の裏に隠れしまま、この世構いし大神の、ミコト畏(かしこ)みこの度の、岩戸開きの御用する、身魂はいずれも生き変わり、死に変わりして練りに練り、鍛えに鍛えし神国(かみぐに)の、まことの身魂天駈(あまか)けり、地駈(くに)けります元の種、昔の元の御種ぞ、今落ちぶれているとても、やがては神の御民(みたみ)とし、天地駈(あめつち)けり神国の、救いの神と現れる、時近づきぬ御民等(みたみら)よ。今一苦労二苦労、とことん苦しきことあれど、堪え忍びてぞ次の世の、まこと神代の礎と、磨きてくれよ神身魂、弥栄つぎに栄えなむ。身魂幸(さち)はえましまさむ。（第六巻　日月の巻　第二帖　一七五）

さわ　　しずか
天騒ぎ　人静なる
人騒ぎ　天勝る

（昭和56年９月４日　大神（香代子先生）のご神示）